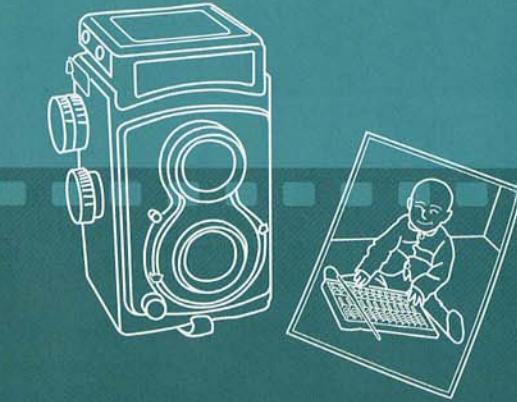


## 特集

# 写真

わたしたちの生活は写真であふれ、ときに写真は記憶を喚起するものとなる。探検の時代であれ、植民地の時代であれ、写真は人びとの過去の記憶を蘇らせる。フィールドで撮影した写真、フィールドで発見した写真をとおし、現代のわたしたちは過去の写真から何を読みとることができるのか、考えてみたい。



## 受信される記憶

港千尋

(みなど ちひろ)  
多摩美術大学教授

### ポストカードの世界

パリに住み始めたのは一九八〇年代で、いちばん印象に残っているのはサン・ジャック通りにあるアパートマンである。六階建ての建物の最上階だった。一九世紀の建築で、当時もまだエレベーターはなかった。日本の七階に当たり、しかもずっと天井が高かったから、今思えば毎日よく上り下りをしていたものである。

窓からの眺めが良かつたから、今思えば毎日よく上り下りをしていたものである。

窓からの眺めが良かつたのが教いだつたのかもしれないが、この住みかのことを覚えているのは、たぶん屋根裏のせいただ。

踊り場の上に梯子をかけ、小さな扉をあけて入ったそこは、自分の部屋からは想像のできない別世界だった。長い長い

にわたつて住人たちが押し込み、忘れていったモノたちがひしめいていたが、粉雪のような埃がふり積もり、何があるのか判然としない。靴箱くらいの大きさの木箱がいくつか転がっている。舞い上がる埃を払つてあけてみると、なかにぎっしり詰まつたポストカードがあつた。モノクローム写真が印刷されたカードで、おそらく二〇世紀初頭のものである。ヨーロッパ各地の建物や公園の写真にまじつて、アフリカの写真もふくまれている。これが、それまで知らなかつた、ポストカードの世界との出会いだつた。

セーヌ河岸の古本屋をのぞけば、こうした古いポストカードが吊るされているのが目に入る。コレクターがいるからで、たいてい地名やテーマ別に分類されて売られている。ポストカード専門の古物商にも会つたが、彼らが扱う量は膨大である。興味をもつたのは、美術館や博物館に収集されている写真や、写真集の出版とは明らかに異質の世界を感じたからであつた。

今日、写真家が写真をポストカードにすることは、展覧会の案内を送るときぐらいであろう。しかし一九世紀末から二〇世紀前半にかけて、ポストカードはひと

つの独立したメディアだつた。その量があまりに膨大であるのと、写真史のなかに体系的に位置づけられているわけではないという理由で、見過されてはいるが、写真の流通という点では、今日のインターネットと比較することができるほど的重要性をもつてゐる。郵便制度の確立を背景にして爆発的に流行したポストカードは、国境を超えて飛び交う写真というイメージの世界を形成したからである。

失われたときへの郷愁に彩られることもあれば、記録としての重要性を認められて、一冊の写真集になることもあるが、

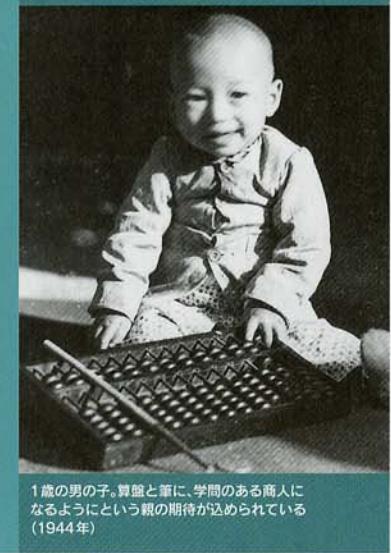
ポストカードの研究にとつて大切なのは、写つてある被写体だけではない。写真家の眼差しが、送信と受信を通じて共有される。いい換れば近代社会のなかにあらたなイメージの記憶がいかにして生まれたか。写真は、個人が送信し受信することのできるメディアとして発達してきたのだ。匿名の眼差しが共有され、ある時代の記憶となつてゆく、そのプロセスを知ることは、ケータイ写真の時代に生きるわたしたちにとつても、十分に意味をもつてゐると思う。



### 個人が送受信できるメディア

窓から見えるのは、たぶん屋根裏のせいただ。

窓から見えるのは、たぶん屋根裏のせいただ。



1歳の男の子。算盤と荀に、学問のある商人になるようにという親の期待が込められている(1944年)



和順郷の益群中学校のOBと村人が1943年、郭沫若によって改編された新劇「孔雀胆」を上演(1948年)



撮影は張溶氏

二〇〇〇年と二〇〇一年、雲南の「華僑の故郷」といわれる保山市騰衝県の和順郷で、国境地域の漢族文化の動態の調査をおこなったとき、数多くの一九三〇年代、一九四〇年代の古写真と出会った。中国では一般的に農家が写真をもつようになつたのは一九四九年建国以後のことなので、今回の発見は非常にめずらしいものである。わたしを驚かせたのは写真を作成した年代の古さだけではなく、その保存状態の良さ、とくに写真の内容の豊富さである。

わたしを驚かせたのは写真を作成した

年代の古さだけではなく、その保存状態の良さ、とくに写真の内容の豊富さである。

個人や家族の写真から、和順郷出身の日本

の留学生たち、留学生たちが創設した小中

学校の入学式式と卒業式。和順郷の人びとが

演じた新劇の場面、村の「洞經会」のメンバ

ーが伝統的な儒教・道教・仏教の音楽であ

る洞経を演奏する場面や遠足の風景、村の

自然風景・市場・壇廟の写真まである。これ

らは二〇世紀前半の中国とミャンマーの

国境地域の日常生活のさまざまな側面、華

僑の故郷としての和順郷の歴史をリアル

に記録している。

数百枚の写真の多くは、わたしのインフ

オーマント(資料・情報提供者)であった張

孝仲氏の父親の張溶氏が撮ったものであ

る。張溶氏は、九二〇年代の初期に和順郷

に移住してきた、一九二七年に和順郷で初

めての写真館「耀光撮影室」を開いた。現在、

その写真館は「耀光撮影室」という名前に

変更され、張溶氏の六〇歳過ぎの娘二人に

よって運営されている。

和順郷の人びとは、これらの古い写真を

大切に家に飾つており、写真に記録されて

いる彼らの祖先が作つた和順郷の歴史を

誇りに思つている。近年、彼らは和順郷の

観光スポットで古い写真展を開催し、写真

をとおして観光客に「華僑の故郷」の歴史

を語つている。こうして二一世紀の観光産

業化のもと、古い写真は和順郷の人びとに

とつて自分たちの郷土の歴史と文化を表

象する手段のひとつとなつている。

「耀光撮影館」のオーナーの話によると、

古い写真は和順郷在住の人びとだけの宝

物ではなく、一時帰国の華人華僑や観光客

もよくそれをお土産として買って帰る

そうである。観光客たちは古い写真をとお

して二〇世紀の初頭における中国農村の

近代化のリアリティを想像する。海外にい

る華人華僑たちにとっては和順郷の古い

写真は彼らの家族、故郷への想いと記憶を

具現化するものであり、彼らのアイデア

イティの確立の媒介でもあるといえよう。

## 「華僑の故郷」の歴史表象

韓敏  
(かん ひん)

本館民族社会研究部

# 世界の屋根の村での撮影

高山 龍三

(たかやま りゅうぞう)

日本ネパール協会関西支部長

いろいろなことを教えてくれた。チベット人社会における骨と肉のシステムを見つけたのも、彼のおかげだ。彼と兄さんで、一人の奥さんをもつていて。一妻多夫のことも聞いた。

チベット人村の住み込み調査も、初めから順調に進んだのではない。まことにばつが通じない。初めはもつぱら耳をならすこと

にし、それより目を使っての仕事を進めていった。すなわち写真で、一軒一軒の家村の人の顔家畜囲い、農地、寺を撮つていった。もちろん行事や作業があるとそこに駆けつけ、写真に撮ることで、「聞き取りをした。そして家の配置と集落の地図を作り、家族関係を聞き、それをまとめて、全家族の系図を作つた。その結果、村の人口も、社会シ

ステムのルールも明らかになつたのである。統計や地図があるわけがないフィールドでは、このように基本的なことからひとつずつつやる必要があつた。

おもにこの村で集めた民族資料の写真も見られ、さらに「使用状況をクリックする」とそれを使つてしたり、身につけている写真が出てくる。

わたしのカメラはカラーとモノクロの2台あり、モノクロについては現像タンクと薬剤を持参、現地で現像して、ネガを日本に送つたこともある。貧乏隊のため、日本のフィルム会社から提供してもらつた。日本を出て帰るまで約半年、防湿に気を遣つたが保管が完全でなく、そのためカラーラは良くない。モノクロは比較的良好に保存され、データベースとして役立つことは嬉しい。

月に一度、村の男がチベット仏教徒、ポン教徒のふたつにわかれ、民家の屋上で読経や話し合い、喫茶をし、酒を飲む

データベースに出ているバルジヨー君は、よいインフォーマントであった。じつに

民博データベースとして、一九五八年わたしたちが撮ったヒマラヤの写真がネット上に公開された。ひじょうにうまく構成されていて、研究者のみなならず一般の方も興味をもつて見ていただけのではないかと思う。地図上でネパールのツアルカ村をクリックするといくつかのテーマが出る。「人物」を押してみると、そこには懐かしいチベット人の顔が並んでいる。この村は民族調査のために、わたしたちが三ヶ月住みこんだ村だ。高さはもつていつた高度計で四三〇メートル、おそらくこの辺でもっと高い定住村と思う。農耕限界ぎりぎりの高さでオームギの单作をしていた。しかし生業の主力は牧畜とキャラバン交易であつた。といつよりその三つの生業をうまく組み合わせて、この厳しい環境に生きてきたのである。

データベースに出ているバルジヨー君は、よいインフォーマントであった。じつに

チベット人はいつも手に糸を握り、糸を紡いでいる。石壁造りの家の屋根には薪が積まれている

ポン教の僧侶による仮面踏りで、村の惡魔封じ

わたしを驚かせたのは写真を作成した

年代の古さだけではなく、その保存状態の良さ、とくに写真の内容の豊富さである。

個人や家族の写真から、和順郷出身の日本

の留学生たち、留学生たちが創設した小中

学校の入学式式と卒業式。和順郷の人びとが

演じた新劇の場面、村の「洞經会」のメンバ

ーが伝統的な儒教・道教・仏教の音楽であ

る洞経を演奏する場面や遠足の風景、村の

自然風景・市場・壇廟の写真まである。これ

らは二〇世紀前半の中国とミャンマーの

国境地域の日常生活のさまざまな側面、華

僑の故郷としての和順郷の歴史をリアル

に記録している。

数百枚の写真の多くは、わたしのインフ

オーマント(資料・情報提供者)であった張

溶氏の父親の張溶氏が撮つたものであ

る。張溶氏は、九二〇年代の初期に和順郷

に移住してきた、一九二七年に和順郷で初

めての写真館「耀光撮影室」を開いた。現在、

その写真館は「耀光撮影室」という名前に

変更され、張溶氏の六〇歳過ぎの娘二人に

よって運営されている。

和順郷の人びとは、これらの古い写真を

大切に家に飾つており、写真に記録されて

いる彼らの祖先が作つた和順郷の歴史を

誇りに思つている。近年、彼らは和順郷の

観光スポットで古い写真展を開催し、写真

をとおして観光客に「華僑の故郷」の歴史

を語つている。こうして二一世紀の観光産

業化のもと、古い写真は和順郷の人びとに

とつて自分たちの郷土の歴史と文化を表

象する手段のひとつとなつている。

「耀光撮影館」のオーナーの話によると、

古い写真は和順郷在住の人びとだけの宝

物ではなく、一時帰国の華人華僑や観光客

もよくそれをお土産として買って帰る

そうである。観光客たちは古い写真をとお

して二〇世紀の初頭における中国農村の

近代化のリアリティを想像する。海外にい

る華人華僑たちにとっては和順郷の古い

写真は彼らの家族、故郷への想いと記憶を

具現化するものであり、彼らのアイデア

イティの確立の媒介でもあるといえよう。

和順郷の人びとは、これらの古い写真を

大切に家に飾つており、写真に記録されて

いる彼らの祖先が作つた和順郷の歴史を

誇りに思つている。近年、彼らは和順郷の

観光スポットで古い写真展を開催し、写真

をとおして観光客に「華僑の故郷」の歴史

を語つている。こうして二一世紀の観光産

業化のもと、古い写真は和順郷の人びとに

とつて自分たちの郷土の歴史と文化を表

象する手段のひとつとなつている。

「耀光撮影館」のオーナーの話によると、

古い写真は和順郷在住の人びとだけの宝

物ではなく、一時帰国の華人華僑や観光客

もよくそれをお土産として買って帰る

そうである。観光客たちは古い写真をとお

して二〇世紀の初頭における中国農村の

近代化のリアリティを想像する。海外にい

る華人華僑たちにとっては和順郷の古い

写真は彼らの家族、故郷への想いと記憶を

具現化するものであり、彼らのアイデア

イティの確立の媒介でもあるといえよう。

和順郷の人びとは、これらの古い写真を

大切に家に飾つており、写真に記録されて

いる彼らの祖先が作つた和順郷の歴史を

誇りに思つている。近年、彼らは和順郷の

観光スポットで古い写真展を開催し、写真

をとおして観光客に「華僑の故郷」の歴史

を語つている。こうして二一世紀の観光産

業化のもと、古い写真は和順郷の人びとに

とつて自分たちの郷土の歴史と文化を表

象する手段のひとつとなつている。

「耀光撮影館」のオーナーの話によると、

古い写真は和順郷在住の人びとだけの宝

物ではなく、一時帰国の華人華僑や観光客

もよくそれをお土産として買って帰る

そうである。観光客たちは古い写真をとお

して二〇世紀の初頭における中国農村の

近代化のリアリティを想像する。海外にい

る華人華僑たちにとっては和順郷の古い

写真は彼らの家族、故郷への想いと記憶を

具現化するものであり、彼らのアイデア

イティの確立の媒介でもあるといえよう。

和順郷の人びとは、これらの古い写真を

大切に家に飾つており、写真に記録されて

いる彼らの祖先が作つた和順郷の歴史を

誇りに思つている。近年、彼らは和順郷の

観光スポットで古い写真展を開催し、写真

をとおして観光客に「華僑の故郷」の歴史

を語つている。こうして二一世紀の観光産

業化のもと、古い写真は和順郷の人びとに

とつて自分たちの郷土の歴史と文化を表

象する手段のひとつとなつている。

「耀光撮影館」のオーナーの話によると、

古い写真は和順郷在住の人びとだけの宝

物ではなく、一時帰国の華人華僑や観光客

もよくそれをお土産として買って帰る

そうである。観光客たちは古い写真をとお

して二〇世紀の初頭における中国農村の

近代化のリアリティを想像する。海外にい

る華人華僑たちにとっては和順郷の古い

写真は彼らの家族、故郷への想いと記憶を

具現化するものであり、彼らのアイデア

イティの確立の媒介でもあるといえよう。

和順郷の人びとは、これらの古い写真を

大切に家に飾つており、写真に記録されて

いる彼らの祖先が作つた和順郷の歴史を

誇りに思つている。近年、彼らは和順郷の

観光スポットで古い写真展を開催し、写真

をとおして観光客に「華僑の故郷」の歴史

を語つている。こうして二一世紀の観光産

業化のもと、古い写真は和順郷の人びとに

とつて自分たちの郷土の歴史と文化を表

象する手段のひとつとなつている。

「耀光撮影館」のオーナーの話によると、

古い写真は和順郷在住の人びとだけの宝

物ではなく、一時帰国の華人華僑や観光客

もよくそれをお土産として買って帰る

そうである。観光客たちは古い写真をとお

して二〇世紀の初頭における中国農村の

近代化のリアリティを想像する。海外にい

る華人華僑たちにとっては和順郷の古い

写真は彼らの家族、故郷への想いと記憶を

具現化するものであり、彼らのアイデア

イティの確立の媒介でもあるといえよう。

和順郷の人びとは、これらの古い写真を

大切に家に飾つており、写真に記録されて

いる彼らの祖先が作つた和順郷の歴史を

誇りに思つている。近年、彼らは和順郷の

観光スポットで古い写真展を開催し、写真

をとおして観光客に「華僑の故郷」の歴史

を語つている。こうして二一世紀の観光産

業化のもと、古い写真は和順郷の人びとに

とつて自分たちの郷土の歴史と文化を表

象する手段のひとつとなつている。

「耀光撮影館」のオーナーの話によると、

古い写真は和順郷在住の人びとだけの宝

物ではなく、一時帰国の華人華僑や観光客

もよくそれをお土産として買って帰る

そうである。観光客たちは古い写真をとお

# 写 真

衆の内戦初期の高揚感が写真から静かに迫つてくる。そして、スペイン内戦の経緯を知る者にとっては、女性の胸に落ちている男性の銃の影は、その後の二人と共和国側の民衆の苛酷な運命を暗示しているかのようだ。

報道写真が出来事や時代の一瞬を凝縮して表現するものであるのに対し、わたしたちフィールド・ワーカーが撮る写真は現地の人たちにとってみれば何ということもない日常を切りとつて記録するものであつて、両者の目的はまったく異なる。しかし、報道写真にせよ、フィールド写真にせよ、見る者に迫真的感を感じさせる写真は、一定の距離を置きながらも、写っている人びと撮影者が時間と場をしつかりと共有していくことがわかるような写真だと思う。ヤババの写真がわたしたちに衝撃を与えるのは、写し込まれた光景や運命のその現場に彼が実際に立つていたことが確実に伝わってくるからだ。事件であれ、あるいは「異文化」であれ、被写体の内側に踏み込んだ撮影者の「立ち位置」がわかる写真ほど、写真は「リアリティ」を描く。

大学院時代の指導教官であった故伊谷純一郎先生は、「スライドを見るとなあ、写つてない周りの風景とか人物とか、そのときの自分の感情とかまで蘇つてくるんや」とよくおっしゃっていた。わたしは二〇年ほどアフリカの熱帯森林で調査を続けてきて、写真もたくさん撮ったが、恥ずかしいことに、いつ撮ったのかさえすぐには思い出せない写真が多い。「フィールド写真については撮影者と被写体のあいだの権力関係をめぐつてさまざまな議論があるが、わたしは自分の『立ち位置』を静かに語れるよくな一枚の写真を撮りたい。

用派、それぞれからの意見が新聞などで紹介され、例えば赤瀬川原平氏は、フィルム撮影の作り出す思いがけない「回性」の有り難みがデジカメにはない、と述べている。この世のある時間・ある場所で一回限り生じる現象や、この世に唯一存在するものに対し、人は特別な感情を抱く。一九三〇年代、文化社会学者W・ベンヤミンはそれを「アウラ（aura）」とよんだ。

印刷、写真、映画など機械的な大量複製技術は、情報のあいだにオリジナルとコピーという関係を作り出す。ベンヤミンは、風、香り、輝きを意味するこのラン語（「オーラ」と同義）を転用し、一回性やオリジナルのもう有り難みをアウラと定義した。発明当初、絵画、あるいは自然や風物の複製手段として出发した写真は、アウラを失わせるメディアだと非難される一方、それを一般人に解放する役割をもつこととなつた、と彼は言う。アナログ対デジタルをめぐる現代の議論にも、写真発明当時と同様の意見分布が見える。

しかし、よく考えてみると、アナログ・メディアにしろデジタル・メディアにしろ、その編集・再生過程でさまざまな変更や修正が可能だ。フィルムであつても、現像・焼きつけによって結果は個々異なる。そこで写真家のなかには、自分が撮ったフィルムではなく、自信作のプリントを見なして保存対象とする人もいる。

であるならば、どこにアウラを感じるのは、人それの立場によって異なるのが当然だ。いや、人為的、機械的を問わず、何らかの操作の結果ではなく、個々の操作がすべてアウラを生起するのかも知れない。と考へると、種々の蓄積メディア上に記録された写真資料のうち、それをオリジナルとして保存すべきか、という民博の抱える宿題にまで、アウラの問題がかわつてくるようだ。

シコのような無名の人がどのような人生を送り、それをどのようにとらえているのか。スラムで会つた人びとの話を聞くたびに、その人の思いがわらしの心に入り込み沈黙する。最後にシコに会つたのは一九九九年八月だった。写真を見るとわたしの心中で、彼の思いが、いやわたしの彼への思いが動き出すのだ。

二〇世紀が生んだ優れた報道写真家の一人、ロバート・キヤバが一九三〇年代のスペイン内戦を取材して撮った写真のなかに、日差しを浴びながら寄り添つて椅子に座つてゐる民兵とその恋人とおぼしき女性の写真がある。写真を撮られることに対する含意と二人で写すことの晴れがましさといった日常的な感情が見る者に伝わつてくると同時に、共和国側に立つた民衆の内戦初期の高揚感が写真から静かに迫つてくる。

二〇世紀が生んだ優れた報道写真家の一人、ロバート・キヤバが一九三〇年代のスペイン内戦を取材して撮った写真のなかに、日差しを浴びながら寄り添つて椅子に座つてゐる民兵とその恋人とおぼしき女性の写真がある。写真を撮られることに対する含意と二人で写すことの晴れがましさといった日常的な感情が見る者に伝わつくると同時に、共和国側に立つた民衆の内戦初期の高揚感が写真から静かに迫つてくる。

## 撮影者の「立ち位置」

竹内 潔  
(たけうち きよし)

富山大学助教授

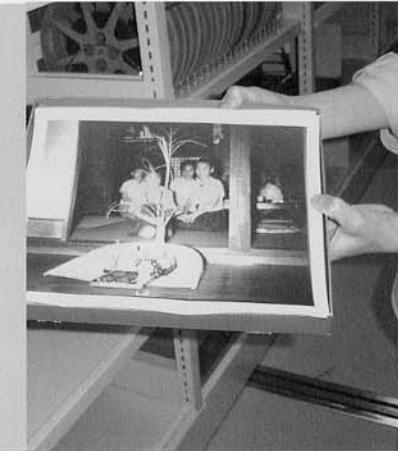


アフリカ、コンゴ共和国の熱帯森林で。網猟の合間に昼寝をする父子

## 写真とアウラ

久保 正敏  
(くぼ まさとし)

本館文化資源研究センター



民博所蔵のプリント資料例



自宅前で自動車メンテナンスの仕事をするシコ

## スラムで生きる人

北森 紘里  
(きたもり えり)

天理大学助教授

現地調査では人に会つて話すことが多い。わたしは、一五年前からブラジルの都市リオデジャネイロのスラムで調査をおこなつてきたが、何人かの人とは家族ぐるみの長いつきあいだ。ここで紹介するシコはそのような友人の一人だ。シコ（フランシスコ）が生まれたのは一九一九年、ブラジル北東部セ阿拉州の農村だつた。若いころリオデ

ジヤネイロにやつてきてスラムに住み、三十歳くらいのとき、スラム・クリアランスに伴つて建設された低所得者向け住宅地に移り住んだ。彼は、子供のころは烟仕事を、リオデジャネイロにきてからは左官やペンキ塗り、自動車修理などの仕事をこなしてきた。ずっと働き続けながら三十年の住宅ローンを払い終わり、妻と子ども三人を養つてきた。彼は長年胃を患つており、二〇〇〇年四月に七十歳の人生を終えた。

シコは胃から吐血して体調の悪い日以外は、日曜日でも働いていた。わたしにとつてシコはいつも「働いている人だつた。彼は「死ぬまで働く」と言つていた。リオ社会は貧富の格差が著しく、富裕層は低所得の人びとに対して「急げ者」として偏見をもつたり、貧しいが健気に生きる人」として理想化したりする。また、わたしは「働く」というとつて苦労して稼ぐ」とか「仕事を生き甲斐にする」といったことを連想してしまう。シコは、こうしたステレオタイプのイメージを払拭した。彼から「苦労した」や「辛い」といった言葉は聞いたことがないし、彼は自分のことを「貧しい」と言つたこともない。リオ社会全体から見れば彼は低所得者であり、彼もそのことを自覚している。しかし「貧しい」わけではない。彼によれば「貧しさ」とは広場で通行人からの施しを受けるように急げて何もしないことであり、働くことは好きでも嫌いでもなく必要なことなのだ。

シコのような無名の人がどのような人生を送り、それをどのようにとらえているのか。スラムで会つた人びとの話を聞くたびに、その人の思いがわらしの心に入り込み沈黙する。最後にシコに会つたのは一九九九年八月だった。写真を見るとわたしの心中で、彼の思いが、いやわたしの彼への思いが動き出すのだ。